

小説『塩狩峠』から命の尊さを考える

二〇一六年十二月二十一日

バイブル・サービス

吉 田 弘 美

皆さん、こんにちは。心理福祉学科で教員をしております吉田弘美です。今日は初めてこの場でお話しをするということで、少し緊張しております。私はキリスト教の信者ではないので、バイブル・サービスにふさわしいお話ができるか不安な気持ちでこの場に立っております。バイブル・サービスの趣旨にそぐわない内容になってしまうかもしれませんが、初心者マークが貴重な体験の場をいただいたということで、今後につなげる一歩としたいと思いますので、どうぞお許し願います。限られた時間ですが、私なりに皆さんと時間を共有させていただきたいと思っておりますのでどうぞよろしく願います。

私は、この仙台白百合女子大学にご縁があって着任したのは、今から十年以上前になります。その際に本学の建学の精神の根底にあるものは、シャルトル聖パウロ修道女会創立当初の精神である、「人間がどのような状況にあっても、それぞれかけがえない存在として大切にされるように進んで奉仕する心」であることを知り、とても共感いたしました。というのも私は、教育の世界に入る前は、体の不自由な方や高齢の方々が生活する施設で介護の仕事をしておりました。介護の基本的な考え方にある「個人の尊厳を保つ」と同じ意味に解釈できるからです。人間

小説『塩狩峠』から命の尊さを考える

の尊厳とは、人間が生きている存在として、その生命や生活が尊くおごそかで、侵してはならない価値のあるものと捉えることです。そしていちばん身近な支援者である介護職や、その指導的立場にある介護福祉士においても利用者の尊厳を侵すことなくその自立生活を支援していくこと、そして、そのことを常に意識して具体的な行動、実践につなげていくことが大切であると感じています。

冒頭でも述べましたが、私はキリスト教の信者ではないので、キリスト教の教えを聖書から引用してお話しすることはなかなか難しいと思います。そこでこれまでの人生の中で関連したエピソードはないか記憶をたどってみました。すると一冊の本との出会いがありました。あるキリスト教徒の短い生涯を綴った小説です。あまりにも結末が衝撃的で、主人公の取った行動をどのように理解すればよいのかわからず、当時は動揺したことを覚えています。その本をこの場で紹介し、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。その本のタイトルは『塩狩峠』です。この本は小説家の三浦綾子氏が書き下ろしたものです。ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、北海道の塩狩峠で発生した、鉄道事故の実話をもとに一九六六年から約二年半かけて、日本基督教団出版局の月刊雑誌『信徒の友』に掲載されたようです。私は雑誌を手にしたことはありませんが、確か自分が二十歳前後の頃に映画化されたものを友人と観た記憶があります。小説のあらすじをここでは朗読というかたちで紹介します。

名寄発札幌行き蒸気機関車が二面の客車を引いては塩狩峠をあえぎながら上って行く。国鉄職員信夫にとって今日は特別な日だった。札幌で幼なじみのふじ子との結婚式の当日なのだ。信夫は同乗していた行人の六造との昔話の中で遠い記憶の中にひたった。

明治十九年東京、信夫の母、菊は熱心なキリスト教徒だったために祖母のトセから離別を言い渡された。ト

セには頭の上がらない父、貞行は離婚をせずに菊を別宅に住まわせた。数年後、トセが亡くなり菊は家に戻ってきたが小学生の信夫は、美しい菊が母親であることに内心嬉しかったが、キリスト教を信じている母が不気味な思いもした。信夫は小学校で同級の吉川と気が合った。吉川には生まれながらの足の不自由なふじ子という妹があった。やがて吉川一家は北海道へ渡って行った。

明治三十二年夏、札幌。信夫は吉川の誘いに応じて札幌の北海道炭鉱鉄道に就職した。その頃、ふじ子はカリエスで三年越しの病床にあった。しかし、信夫は十九歳の彼女の美しさ、明るさに目を見張った。ある日、信夫は主任の和倉から娘をもらってほしいと頼まれた。しかし、信夫はすでにふじ子に心を寄せており、吉川にふじ子を妻に欲しいと正式に申し込んだ。そして吉川からふじ子はキリスト教徒だと知らされた。そこで初めて信夫は、ふじ子の陰りのない静かな微笑の原因がわかったような気がした。信夫は聖書を熱心に読み始めた。仕事の傍ら日曜学校の先生になり、子供たちと一緒に賛美歌を歌い、祈る信夫の目はいきいきと輝いていた。

信夫は歩けるようになったふじ子と結婚することになり、札幌行きの列車に乗った。信夫の長い記憶が突き破られた。「汽車が離れた！」塩狩峠をあえぎあえぎ上っていた最後の客車の連結器が離れて逆走し始めたのだ。直線の先の急カーブを曲がり切れない。信夫の臉に花嫁姿のふじ子が映る。合掌したまま信夫はデッキから身をひるがえした。車内にガクンと強い衝撃。車輪は止まっていた。

これはあらずじの一部です。皆さん、いかがでしたか。私も衝撃を受けたと同時に、皆さんもこの結末には驚きがあったのではないでしょう。多くの人の命を救うために自らの命を捧げるといって、これよりも大きな愛は誰も

持っていないと思いますし、誰にもできることではありません。主人公の信夫は、鉄道職員として信仰を職務実行の上に表し、人命救助のために殉職の死を遂げられました。残念ながら実話である彼の日記や手紙などは彼の死後、一切焼却されたということで、心の内面を詳しく知ることはできません。しかしながら彼の心の内面をよく象徴していると思われるひとつの事実が明らかになっています。それは、彼は日頃から遺書を自分の内ポケットに秘めていたということでした。彼は神と隣人のためにはいつでも命を捧げると心に決意を表明するものだったようです。

人生の終わりを見つけて生きている人と、人生の終わりを考えないで生きている人というのは、確かにその生き方に大きな差があると思います。これまでの人生の集約としてどのように生きるかということの大切さを改めて考えてみたいと思いました。ここで私がいろいろ感じたことは、例えばこの信夫さんが亡くなった後、婚約者のふじ子さんはどのような思いでその後の生涯を送ったのかとか、もっと皆が助かる方法はなかったのかとか…。しかし、考えてみればキリスト教徒である信夫さんにとって、もし自分がそのときその行動を起こさなければ、おそらく生涯その罪を自分が背負って、悔いてどのような人生になったのかもわかりません。そのときは信夫さんにとって最善の方策だったのかもしれない。こういう話というのは現代では珍しいかもしれませんが、やはり生きる意味を常に考えて毎日を大切にするということを感じさせられた小説でした。

最後にクリスマスが近いバイブル・サーピスということで、『見上げてごらん夜の星を』という歌を歌いたいと思います。クリスマスツリーの星は、希望を示すものだと聞いていますので、今年一年を無事に過ごせたこと、来年も良い年になることを願って一緒に歌いたいと思います。今日は、私がふだん関わっている、心理福祉学科の介護福祉士養成課程で学ぶ四年生の鷺尾咲良さん、齋藤多絵さんにご指導をいただきます。鷺尾さんは手話サークル、齋藤さんは合唱部であり、お二人とも聖歌隊に入っています。私は歌があまり上手ではないので、一生懸命に手話

を覚えてきました。二人に協力してもらいながら歌いたいと思います。皆さんもよろしければ一緒に歌ってください。

「見上げてごらん夜の星を」

見上げてごらん 夜の星を

小さな星の 小さな光りが

ささやかな幸せを うたっている

見上げてごらん 夜の星を

ぼくらのように 名もない星が

ささやかな幸せを 祈ってる

手をつなごう ぼくと

追いかけてよう 夢を

二人なら 苦しくなんかないさ

見上げてごらん 夜の星を

小さな星の 小さな光りが

小説『塩狩峠』から命の尊さを考える

ささやかな幸せを うたっている

見上げてごらん 夜の星を

ぼくらのように 名もない星が

ささやかな幸せを 祈ってる

(心理福祉学科専任講師)